

教育随想

ふれあい



Nとの日々の記録抄

桃谷アサ

不惑の年を迎えても、なんと教育の道は遠く険しいことか——教師以上に生徒たちにとっても多難な、まさに教育戦争時代が変わってきている昨今かと思ひ惑う日々でもある。

N、彼はあたかもこの時代から取り残されたかのように、入学以来堅く口を閉ざしたきり先生がたと話さなかつた。毎日、毎時間身じろぎもせず、じつとがまんしつづけ折書きつけるノートには、彼の現在と過去の生活がこんとんと入り混じって、にじみ出ている。「中央手術室」「国見農協給油所」「SUNNY」「HONDA」等々。

そのNが—なんとなく近寄ってきて話し始めたのである。ここ県境の里、厚樫山のすそ野の台地に桜が満開の四

○四月二十一日(月)

「私の夢」を書いて提出したのでびっくりした。作文というよりは心の詩叫びと言ったほうがびつたりかもしれないものだった。

耕うん機に乗りたいたい
耕うん機に乗って田をうなってみたい

自動車に乗ってみたい
バイクに乗ってみたい
もっと勉強して
うまく運転してみたい

放課後寸評を添えて掲示。十分間対話を始めた。できる限り続けたい。

○四月二十三日(水)

作文を朗読して他生徒の感想を記録発表させる。Nのいぢぢな気持ちに一同心打たれるものがあつた。後で「恥ずかしがたい」ともらしたNのうれしそう、な、てれくさそうな姿が忘れられない。Nのまともな心に出合つた感じがした。

よろず帳に記名、一時間にせめて半ページだけでも勉強するよう記す。

○四月二十六日(土)

胃の調子が悪いのを気にしている。

「ごご胃袋? 痛んだ。水おどしだべが」と押さえて聞く。理科の消化器官の学習は一ページにわたつていた。一つ進歩。

○五月七日(水)

花壇の草木の植えかえを整美部員とする。Nもその一人。周りで突っ立っていたが言われてちよつとだけうなつ

た。しばらくぶりのことで、電話の話を。私の電話番号を教え、七時に電話でお話をする約束をした。ところが、四時三十五分に掛けてよこしたらしい。その後二、三回沈黙電話がありわが家では何事かと怪しんでいた。約束の七時にはおとさたなし。こちらから電話を入れるとばあちゃんが出る。内弁慶で、だれの言うことも聞かず、口を余し、いたすら、大きわざのしほうだい、ほとほと手を焼いている様子。学校などでのうつぶんを晴らしているのだろうか。仕事だけはみつちりさせたいと話し合ふ。

○六月九日(月)

給食当番でおせん洗いを一人でやっていたので、思わず「えらいっ」と肩をたたいたらニッコリした。

その後も日々次々と事件は絶えないが、清掃は黙々とやるようになり、ノートも前より書くようだ。折節の面談はとだえがちだが、話の内容も少し向上し、他の先生がたにも一言二言答えて始めている。

今、期末テストのNの答案に

o a + o a || 15g を発見。翌日、喜びを伝え、肩をたたいて励ます。

堅く口を閉ざしたNの、こうした必死の自己発見の足跡を見るにつけわたしは、Nのためにできるだけ支えになつてやらなければと思う。たとえそれが遠く険しい道であっても、ささやかな努力であつたとしても——

(伊達郡国見町立東北中学校教諭)